

# 福島県立安積高等学校

## 第128期生卒業証書授与式 式辞

日 時 平成27年3月1日（日）10：00～

場 所 福島県立安積高等学校第一体育館

### 式 辞

（春めく陽射しが学舎に降り注ぐようになり、）安積野の大地にも少しずつ躍動の気が満ちてきた今日の佳き日に、県議会議長代理者であります県議会議員 山田平四郎様を始め、御臨席いただきました御来賓の皆様方に、卒業生の前途を祝福していただき、第128期生卒業証書授与式を挙行できますことは、卒業生はもとより、職員・生徒一同この上なき喜びと感じており、深く感謝申し上げます。

保護者の皆様には、卒業式に臨むお子様の晴れ姿を御覧になり、お喜びもさぞかしのことと、心からお祝い申し上げます。また、これまで本校教育の推進に、御協力、御支援を賜りましたことに改めて感謝申し上げます。

卒業生の皆さん、卒業おめでとう。皆さんは、3年間に亘る安積での学びの時を過ごし、栄えある安積の128回目の卒業生として巣立つことになりました。しかし、皆さんが飛び込もうとしている社会は、東日本大震災後の厳しい社会です。

皆さんは、4年前の3月11日、皆さんが中学校の卒業生を送り出したその日に発生した、大地震・大津波とそれに続く東京電力福島第一原子力発電所の事故は、多くの日本人の価値観を変えるほどの大変な出来事でした。事故発生当時とその後の事情については、皆さんそれぞれ異なっていると思いますが、大震災は皆さんの高校生活に何らかの影響を及ぼしてきたのではないのでしょうか。

あと10日で丸4年が経過しようとする中、大震災の直接の影響は、少しずつ薄くなってきたようにも思えますが、復旧が進んだ部分もある一方、福島県は真の復興に動き出しているとは言えない厳しい状況が続いています。大震災以降、「ふくしまのために何かをしたい、ふくしまの復興に自分の学びを活かしたい。」このように考える高校生が増えていきます。勿論、世界へ飛躍しようとしている生徒も大勢いるわけですが、その場合でも、「3・11以降のふくしま」を心にとめてけっして風化させることなく、できれば福島の地にしっかりと足をつけて活躍してほしいと願っています。

卒業生の皆さんは、安積高校創立128年目に入学、同期生と共に安積の時間を刻み、今年度、安積にとって大きな節目である130周年に立ち会うことができました。この安積で、場所・時間や言葉・記憶を共にし、勉学に励み、部活動で仲間の大切さを実感し、1年次と3年次に2回経験することができた紫旗祭でクラスが一つになり、安積の空気を胸一杯吸い込み、「安積」という学校文化を3年間共有してきました。正に安積の誇り・プライドを身につけたのだと私は考えます。

更に言うならば、安積の精神・スピリッツである「開拓者精神」「質実剛健」「文武両道」を胸に刻み、安積高校という特別な<sup>どろば</sup>壇場の中で、仲間と共に安積の時間を過ごしていく内に、他の高校では見られない「自主自律」のスピリッツをベースにした発酵現象が起こり、自分にも先生にもよくわからない何か不思議なものが、大げさに言えば生涯効き目が続く安積ブランドの酵素のようなものが安高生の中に醸し出されたのではないかと私は思います。

皆さんは、卒業後も更に多くの人々と出会い、関わりながら生きていくことになります。どうか、奇跡としか言いようがない出会い・巡り会いを大切に、志を高く掲げて夢の実現を目指し、常に謙虚で誠実であることを心がけ、感謝の気持ちと思いやりの心を持って歩んでください。開拓者精神と自主自律の安積スピリッツを持って進んでいけば、どんなに高い壁が目の前に立ちふさがったとしても乗り越えていくことができるはずです。

皆さんは、安積という130年の歴史を持つ大きな殿堂に、釘を一本しっかりと打ち込みました。皆さんが目指すところはそれぞれ違っていると思いますが、例えば、弁護士を目指す人であれば、法曹界という大きな世界・殿堂があり、医師であれば、長い歴史を持つ医療の世界という世界・殿堂があるはずです。皆さんそれぞれがこれから飛び込もうとしている殿堂に、皆さん一人ひとりが持っている釘をしっかりと打ち込み、その殿堂をより高く、より大きくしていく、という気概を持ってほしいと思います。

学校に残る私たちは、安積の良き校風と伝統をさらに揺るぎないものとし、益々地域に信頼され、「七州の覇者」という名に相応しい安積高校にすることを決意して、皆さんを笑顔で送り出したいと思います。

皆さんの前途洋々たる未来を祝し、皆さんが、安積スピリッツを胸に秘め、その澄んだ瞳に大きな翳りを宿すことなく、充実した幸多き人生を歩んでいくことを、そして、それぞれにとっての「覇権の剣」をしっかりと握ることができることを祈念して式辞といたします。

平成27年3月1日

福島県立安積高等学校長 久保田範夫